

原爆ドームについて朝日新聞社へ送った佐藤の手紙

民俗建築アーカイブ担当

Shigeo Sato's Letter to the Asahi Shimbun Concerning the Atomic Bomb Dome

Editorial Committee

佐藤重夫前会長は昭和42年に当時の浜井信三広島市長の相談を受けて、野放し状態になっていた原爆ドームの保存修理に取り組んだ。4月5日に原爆ドーム保存工事技術委員会を立ち上げ、多くの協力のもとに工事は無事終わった。この後、佐藤は原爆ドームの在り方について多くの提言をし、密接にかかわっていくことになる。平成元年（1989）の原爆ドーム再補修工事も佐藤は陣頭指揮を執っている。77歳のときである。マスコミは佐藤を原爆ドームの主治医と紹介し、多くの活動を取り上げて記事にしてきた。

さて、平成10年（1998）7月、朝日新聞は『原爆ドーム』（著者 朝日新聞広島支局、朝日文庫）を発行した。記者が佐藤にも取材に来た関係もあって、佐藤は1冊献本を受けた。新聞記者が多くの取材をもとにまとめたもので、原爆ドーム（広島県物産陳列館、後の広島県産業奨励館）の建築的特徴、設計者のヤン・レツル（チェコ人）の仕事、保存運動、平和の記念碑と遺産の未来など、多方面からの取材をまとめた労作と言える。佐藤はこの本を読んでみて概ね評価したが、間違った箇所もいくつかあるのが気になった。このような取材をもとにした本は、証言者の知識の間違いや、取材後の検証の不足、記者の能力や恣意に影響されることが度々ある。佐藤は建築の専門家として、この本がそのまま多くの人に読まれて、間違った知識のまま広がっていくことを黙認することは出来なかった。さっそく朝日新聞へ手紙を出して、誤りを指摘してあげた。佐藤の好意であった。以下にその手紙を紹介する。

「 平成10年7月10日

朝日新聞大阪本社社会部 ○○○○ 様

佐藤重夫

昨日貴社広島支局編原爆ドームの朝日文庫本御恵贈いただき感謝いたします。よい本を出していただき、社会により御貢献ができることと御同慶に堪えず、厚く御礼申し上げます。

ただ二つの点について危惧申し上げたいと思います。

(1) それは、お人良しの日本人の欠点ですが、本筋や哲理に心を通わせることなく、格好に流行や形（表面上の）などにすぐとらわれて、政治を始め生活も建築も文章もとかく、そのように流れてゆくことでありまして、科学、技術、技能として同様なのです。大昔から現在まで全て、その欠点があったところにあり、その欠点を除けば、日本人の人の良さは世界から一層羨望されることになるのでして、日本の失敗は全てその欠点の引き起こしてゆくものでありました。要するに真の意味の謙虚さが無いことだと思ひ、多くの先輩や多くの聖人がそれを忠告してくれています。従って広島平和記念碑（原爆ドーム）がとかく発信源だとたかぶって、観光に結ばれてゆく危惧が一層助長されることであります。実はそうではなく、本当の祈り、記念、平和、慰霊、等々から自然に社会にそれが広まってゆく納得が本物の状態であるはずであります。従ってこのドームは以前はとにかく遺跡であって建築物ではないのです。だから建物の変化し、バラバラに破壊された一部が残ったけれども、その建物が大きい珍しい（広島には）ものであったが、その建物自体は脆弱な構造で、日本を本当に当時としても知らない欧州人が、欧州流に造ったものに過ぎず、それが不思議に残った中心部の原因は真上が原爆破裂の点であったからというだけなのです。薄くてレンガも、モルタルも既に雨露に晒されて、毎日ポロポロと落下していたのでして、できればその状態をある一時点で止めることを私は浜井市長（故人）より相談をうけたのです。従ってその時点

が人の頭の中で思われるように保存しようと努めたのですから、危険な傾いたものを止むなく垂直に起こしたり、ぶらぶらしたものをくっつけたり、(レンガの中の空隙、すなわちレンガはモルタルも同様に水さえ吸ってくれる空隙がいっぱいあって石やガラスとは違うのです)、そのレンガもモルタルも石もみんな一体化してしまうように当時の高級樹脂(水よりも何よりも粘り気のない材料で体積が変化しないようにませものを一切しないで原液そのもの)を圧力をかけてレンガの中やモルタルの中に圧入したので、流し入れたのではないのです。その圧力で樹脂が外に漏れ出ないように樹脂モルタルで目地や割れ目をつめて、圧入して石と共に薄い壁を一枚の板のようにしたわけでありませ。しかしそれでもその薄い板はすぐ倒れますので、やっとなりかかれる程度の鉄骨をそうとなり添えていただいたわけませ。

基礎は地盤が悪い処ですから、地固めの松杭打ちをされたようませ、一部掘ってみたところ全く無く、中央の高い部分にのみ施されたのか解りませ。椋代先生も一寸鉄骨のベースのときに掘ってみられた(探るていど)ようませ、杭らしいものはなかつたようませ。故松山通太郎氏が工業学校生徒時代に見た杭打ちは地盤改良の一種として、地盤の悪い処や、水気の多い部分などに松杭を打つて、多少地盤を改良する千本突きのことではないかと思ふ。女人夫が大勢ヤグラの綱を曳いて打つたのませ。このやり方がレツルは珍しかつたのでしよう、女棟梁が大きな声で人夫が綱を引張る音頭をとるので、その音頭のとり方が面白いので感心されたのでしよう。女棟梁に感状を渡したと原爆ドームの工事請負者椋田組の老婦人より私はききました。昭和40年(1965)の頃ませ。このことを新聞の婦人記者が興味をもつて電話で聞いてこられたが、こういつた千本突きは建物の地業の栗石突きなど日常一般に行つていて、特に当時としては珍しい変わったことではないと返事をしておいた。ただ現在の若い人は見た方も少ないし、学校でも先生自体が御存知でないことも多かつたので、だんだんと脱線が多くなつて、大したことでないが大したことになつたりするわけませ。マスコミもまた同様ではないでしようか。

(2) 次に第2の点ませ、この本の44頁のところの終わりから3行目に天野忍という方が、レツルとしてはそれなりに耐震の事を考へていてと述べておられるが、天野さんはどういふ方か存じませが現代のポストモダン芸術家のように、人と一寸変わったことさえすれば上手な芸術家だと自負したり、おだてられたりするのと同様に、建築家の大部分も、芸術家の大部分も、それを謙虚に勉強している人ばかりでないので、そうなのませ、レツルはそういつた当時の一人であると思ふませ。派手好みで、^{からずもり}鳥森や新橋あたりの芸者を何人も乗せたヒゲの青年のオープン自動車に乗つた写真も故市石助手より私は見せてもらつていて。とにかく助手の言うことなど一切聞かぬワンマンであつたようだ。従つて広島に既にたくさん煉瓦造建築もあつた(ドームより10年も前の)煉瓦造と異なり、控柱(バットレス)など一切無く、内部の木造大梁をただレンガに僅か15cmにも足らない孔に差し入れて木造の床(二階、三階床)を持たず程度の設計ですから、しかもスパン(梁間)の大きな室内ですから爆圧で、瞬時に内部の木造は屋根もろ共おしつぶされ、やがて火を出すことになるわけませ。中央の階段室の処は比較的レンガ壁が多く、且つ壁が四方に連続しているので、残存しやすかつたのだと思ふませ。その部分が現在残存のドームの主要部であります。窓の方立など棒鋼が1本入れてあるだけだし、窓^{まぐさ}楣は棒鋼の先を直角に折り曲げたものが2本入れてあるだけで、鉄筋コンクリートというものでは全くないませ。陳列室だから窓を大きくとる必要があつたのなら、もっと壁を厚く、バットレスをつけて、鉄骨でもっと強い建築構造にすべきませ。レツルの設計で東京神田橋南詰にあつて、関東大震災で一部の外壁(玄関部)が残つていた衛生会の外壁と同様に、構造は全く無視し、オーダーの柱も柱としての役目よりも飾り物の一つとして用いられるなど、あまりにも自分の好み次第を建築設計に入れる芸術家であつたようませ。神戸か、何処かの博覧会の入り口の門では門の上から煙突が出るようなのを設計していましたが、これは実現しませませんでした。人の意表を突くデザイナーだつたようませ。日本やなんかのデザイナーの現在の心にも大変良く似た人がたくさんおります。私は日本人

のデザイナーで故吉田鉄郎氏とごく終わり頃の故堀口捨己氏の両先輩のみが日本の本当のデザイナーであったように思います。他はみなどこか邪念の臭気がただよっているように思います。以上、二つの点が、頂いた本が将来社会を誤解せしめる点ではないかとおもいます。編集の将来、増刷や改訂の参考のためにお届けしておきます。」

佐藤の手紙は以上である。

さて、レツルの日本での仕事であるが、レツルは明治40年(1907)来日し、横浜のゲオルク・デラランデ建築事務所で働き始めた。明治42年(1909)春、聖心女子学院本館、同学院正門を造った。このあと独立してチェコ人ヤン・ホラーと共同で「レツル・エンド・ホラー合資会社」を設立し、^{ふたば}雙葉高等女学校校舎(1910)、大日本私立衛生会会館(1911)、上智大学校舎、松島パークホテル(1913)、そして広島で原爆ドームとなる広島県物産陳列館(1915)、宮島ホテル(1917)などを設計した。大正9年(1920)に一時帰国したが、大正11年(1922)に再来日し、翌大正12年9月1日の関東大震災に遭遇したのである。これによって東京にあったレツルの建築はことごとく倒壊した。それほど耐震性のない建物であった。ただ、横浜のゲオルク・デラランデ建築事務所時代に建てた聖心女学院本館校舎と正門は倒壊を免れた。レツルは震災後傷心のまま日本を去ってしまい、そして2年後の1925年、プラハで病死したのである。わずか45歳の若さであった。だからレツルはその後の作品の運命は知る由もない。地方にあって関東大震災の被害を受けなかったレツルの建築も、その後の戦災や火災によって次々と消滅していった。聖心女学院本館は東京大空襲で炎上、戦災を受けず戦後も残った宮島ホテルは火災(1952)、宮城県の松島パークホテルも火災(1969)、となくなって消えてしまった。不思議にも現在も健全に残っているのは聖心女学院正門ただ一つである。そしてもともと虚弱体質で建てられて原爆にも遭遇した広島県物産陳列館は髪の毛も肉体も焼かれてスケルトンの形で残り、その後も何度か瓦礫にされることを命拾いして、今は世界遺産として平和祈念の象徴になっている。これをヤン・レツルは天国でどのような思いで見ているであろうか。

さて、佐藤とレツルの接触は全くない。然し佐藤が原爆ドームに関心をもつと同時にレツルの研究を進めて、「広島原爆ドームとヤン・レツルについて」(日本建築学会大会学術講演梗概集、1968年10月)を発表している。レツルの建築事務所で働いていた市石英三郎氏のご存命で、佐藤は当時の写真や図面の提供を受けることができた。その時に収集した写真や資料は貴重で、多くは広島大学に寄贈している。佐藤のアルバムにはわずかにしか残されていないが、その中から比較的鮮明なものを選んで掲載することにした。